

からす

小川未明

青空文庫

頭あたまが過敏かびんすぎると、口くちや、手足てあしの働はたらきが鈍にぶり、かえつて、のろまに見みえるものです。純じゆんきち吉きちは、少しょうねん年の時じぶん分にそうでありました。

学校がっこうで、ある思慮しりよのない教師きょうしが、純じゆんきち吉きちのことを、「おまえは、鈍どんきち吉きちだ。」と、いったのが原因げんいんとなつて、生徒せいとたちは、彼かれのことを鈍どんちゃんちゃんとあだ名なするようになりました。

「ドンチャン、早はやくおいでよ。」

学校がっこうへの往復おうふくに友だちともは、こういったものです。しまいは、本ほん名みやうをいうよりか、仲間なかまの間あいだ柄がらだけに、あだ名なで呼よぶほうが、親したしみのあつた場合ばあいもあるが、そばを通とおつたどらねこ

に、石を投げるのが遅かったからといって、心から軽蔑した意味で、

「ドンチャンでは、だめだなあ。」と、いったものもあります。

彼は、自分より年下の子供たちからも、

「ドンチャン。」と、いわれることに対して、けっして、快くは感じなかった。ただ、黙っていたままでした。そして、自ら憤りを紛らすために、にやにや笑ってさえいました。だからいつそう、みんなが彼をばかにしたのです。

ときどき、純吉は、自分を侮る相手の顔をじつとながめることがありました。

「あの面に、げんこつをくらわせることはなんでもない。だが、

己おれが、腕うでに力ちからをいれて打うつたら、あの顔かおが欠かけてしまいはせぬか？」

そう、心こころの中なかで思おもうと、なんで、そんなむごたらしいことがで
きましよう。しかし、相あいて手が、いつも自分じぶんより弱よわい、年としの少すくない
ものとは、かぎっていませんでした。純じゆん 吉きちよりも大おおきい力ちからの
強つよそうなものもありました。

すると、また彼かれは、思おもったのです。

「おれは、負まけてもけつして、あやまりはしない。けんかをした
ら、命いのちのあらんかぎり組くみついていいるだろう。その結けつ果かは、どう
なるのか？」

どちらかが傷きずついて倒たおれるのだと知しると、彼かれは、そんな事じ件けんを

ひ
引き起こす必要ひつようがあるうかと疑うたがったのです。

西にしの山やまから、毎まい朝あさ早く、からすの群むられが、村むらの上じようくう空とを飛と

んで、東ひがしの方ほうへいきました。そして、晚ばん方がたになると、それらの

からすは、一日いちにちの働はたらきを終おえて、きれいな列れつをつく、東ひがしから、西にし

へと歸かえつていくのでした。

彼かれらは、こうして、つねに友ともだちといっしよであつたけれど、

たがいの身みを支配しはいする運命うんめいは、かならずしも同おなじではなかつた

のです。中なかには、意い外がいな敵てきと出合であつて戦たたかい、危あやうく脱のがれたとみえ、

翼つばさの傷きずついたのもあります。

この不幸ふこうなからすだけは、みんなから、ややもすると後おくれがち

でした。けれど、殿しんがけを承たまわつたからすは、この弱よわい仲間なかまを、後こうほう方ほう

にのこ残すことはしなかつた。なにかあいず合図をすると、たちまち整つた陣形は、しばしみだ乱れて、傷つきずいたからすを強つよそうなもの間へ入れて、左右さゆうから、勇氣ゆうきづけるようにして、連つれていくのでした。「からすのほうが、よつぽど、偉えらいや。」

純吉じゆんきちは、空そらを仰あおぎながら、つぶやくと、目めの中なかに熱あつい涙なみだのわくのおほを覚おぼえました。

ある日ひのことです。田圃たんぼへ出でて、父親ちちおやの手助てだすけをしていると、ふいに、父親ちちおやが、

「純じゆんや、あれを見みい。鳥とりでさえ、弱よわいものは、ばかにされるでな。」と、いいつたのです。

純吉じゆんきちが、父親ちちおやの指さす方ほうを見みると、驚おどろいたのです。翼つばさの

端はしの取れた衰あわれなからすを、仲間なかまが意地悪いじわるく、列れつの中なかから追おいだそうとして、右みぎからも、左ひだりからも、つついているのでした。

「ああ、わかった。一昨日おとといは、あんなにしんせつにしてやったけれど、いつまでも弱よわいと、じやまになるのだな。」

純じゆんきち吉きちは、自分じぶんが弱よわくないことを、どうしても見みせなければならぬ氣きがしました。だが、自分じぶんの強つよいことを示しめすために、仲間なかまとけんかをしなければならぬだろうか？

彼かれは、やはり迷まよったのでした。そのうちに、小学しょうがっこう校がうを出でました。もう、だれも、彼かれのことを、「ドンチャン。」と、いうものもなかったのです。

その後ご、彼かれは、村むらで、氣きの弱よわい、おとなしい青せい年ねんと、見みなさ

れていました。

戦争が、はじまつて、純吉が出征に召集されたとき、父親は、ただ息子が、村から出た友だちに引けを取らぬことを念じたのでした。

「お父さん、私は、意気地なしではありません。ご心配なさらないでください。」

純吉の家に残した言葉は、ただ、それだけでした。

その日、中隊長は、兵士らを面前において、厳かに、一場の訓示をしました。

「諸君は、なんとという幸福者だ。じつに、いいときに生まれ、天皇陛下のために、お国のために、つくすことができるの

だぞ。よろこ喜んでいさ勇んで、思おもう存ぞんぶん分はな働はたらきをしてもらいたい。」

なが長い眠ねむりから、いま、目めがさめたように、満まんめん面めん紅こうちよう潮ちようを注そそ

いで、につこりとしたものがあります。それは、純じゆんきち吉きちでした。

「そうだ！ いまこそ、ほんとうに、自じぶん分の身みを粉こにして、打うち

当あたるところができるのだ。」

もつとも勇ゆうかん敢たに戦たたかつて、華はなばな々なしく江こうなん南なんの花はなと散ちつた、勇

士うしの中なかに、純じゆんきち吉きちの名ながありました。この知しらせが、ひとたび

村むらへ伝つたわると、村むらの人ひと々びとは、いまさら、英えいゆう雄ゆうの少しょう年ねん時じ代だい

を見直みなおさなければならなかったのです。

「さすがに、英えいゆう雄ゆうはちがつていた。なんといわれても、仲間なかまと

は、けんかをしなかつたからな。」と、その当とうじ時じ、彼かれのあだ名なを

いった友だちまでが、語り合いました。

丘おかに建てられた、新しい墓標ぼひょうの上うえを、いまも、朝あさは、西にしの山やま

から、東ひがしの里さとへ、晩方ばんがたには、東ひがしの空そらから、西にしの空そらへと、帰かえつて

いくからすの群れむがあります。そして、哀あわれなものを、労いたるかど

思おもえば、また、いじめるというふうに、矛盾むじゆんした光景こうけいを空そらへ

描えがきながら。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

からす

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>